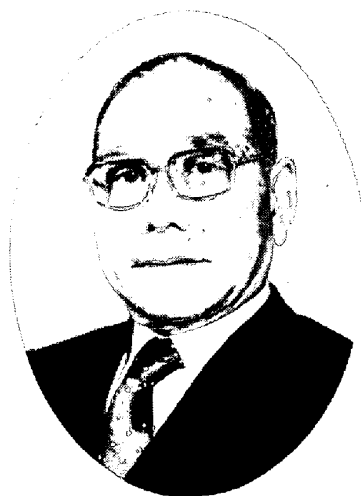


## 1977 年 の 新 年 に 当 っ て

会長 小 林 佐 三 郎\*



会員の皆様、新年お目出とうございます。

新年に当つて、鉄鋼界に身をおくものの1人として、日本の鉄鋼業が今や世界の鉄鋼業にまで発展した今日、われわれの世界に対する姿勢について考えてみたいと思います。

日本の鉄鋼業はわが国経済発展の原動力となると同時に、産業の基礎資材を提供して来ました。また最近の10年間は世界経済の順調な発展と共にわが国の鉄鋼輸出が逐年増加し、日本は世界の鉄鋼基地といわれる程になりました。日本の鉄鋼は高い品質と納期、価格等の取引条件の有利さから、大勢としては海外諸国からも歓迎されて来たといえましょう。

現在の日本の粗鋼生産量は世界の生産量の6分の1、鉄鋼貿易量は世界の4分の1と非常に大きな比率を占めるに至っております。従つて、日本の輸出量の増減が、ある国の鉄鋼市況、鉄鋼業に極めて大きい影響を及ぼし、その衝撃は当事国にとっては、日本で想像するより遙に大きなものとなる場合があります。

米国では、昨年春一旦決定した鋼材の値上げを決定直後に取消していますし、また一時景気回復の見込から予定していた増設計画を各社が相ついで中止または延期しています。

欧州では、フランスやベルギーの鉄鋼各社の操業率の極端な低下から従来通りの経営形態の存続が困難になつたとも聞いております。今回の欧米の不況は従来のものとは趣を異にするようですから、日本としてはその根本原因を究明することが急務であり、これらの国の鉄鋼関係者の心に立入つた理解が必要であるように思われます。

鉄鋼輸入制限問題に対する対応を誤れば、輸入制限の動きを他業種にも波及させ、日本の貿易にとつて由々しい事態を引起すおそれがあります。

しかし品質の特に優れた材料や独特の特色のある製品はオールマイティで、好不況にかかわらず何時でもどこにでも通用し、需要者はどこからでも入手しようとし、今後のわが国の産業は、こうした世界の市場に大手を奮つて闊歩できる材料、製品の創出に努力すべきであると思います。

戦後におけるわが国鉄鋼業の発展過程をみますと、外国からの導入技術が主役をなした時代から、自

\* (株)日本製鋼所 会長

主技術の開発が中心をなす時代に移り、それが現在も続いておりました、この間多くの新製鉄所が相ついで建設されました。この後半期に開発された新技術、蓄積されたノウハウは尨大なもので、わが鉄鋼業の貴重な財産であります。また先進諸国や開発途上国にとっては、製鉄所の合理化、近代化や新設に直接役立つもので垂涎の的であります。

これらの新技術、ノウハウを世界の鉄鋼業の発展のために逐次提供することは、日本の鉄鋼業の世界における重要な役割の一つであり、こうした指導的役割を果たすことが、わが国鉄鋼業が世界から理解され尊敬されることにも通じるものであります。

新技術を惜しみなく世界に提供しうるためには、常に新たな研鑽によつてさらに新しい技術を開発して行くことが必要で、これは決して容易な道ではありません。しかしわが国の鉄鋼業を敗戦後の壊滅状況から現在にまで発展させた日本の鉄鋼技術者のバイタリティをもつてすれば、色々な制約を乗り越えて、新技術を開発し、より優れた品質、特徴ある製品を今後も創造し続けて行けることを確信するものであります。

(以上の所感には、田畑協会専務理事が最近の海外出張によつて直接えられた情報や観測を参照させて頂いた点が多い、付記して同氏に謝意を表する)